

# INVITATION

Ehime University Hospital [愛媛大学医学部附属病院広報誌]

VOL

54

2018

## 地域社会・医療・研究を繋ぐプラットフォームとして

- DOCTOR'S VOICE 01 社会から求められるニーズと、当院のシーズを繋ぐ
- DOCTOR'S VOICE 02 健康寿命を延ばすため、血管年齢を判別する簡易指標を研究
- DOCTOR'S VOICE 03 多様性を認め、ファミリーのように相談し合える環境
- DOCTOR'S VOICE 04 愛媛県の医療を牽引する、中心的な役割を期待



## 橋渡し研究推進担当副病院長の紹介

## 社会から求められるニーズと、当院のシーズを繋ぐ

病態生理学講座 教授 副病院長 (橋渡し研究推進担当) 今井祐記

私の研究は、大きく二つの柱からなっています。一つは、整形外科医としての経験から、骨・関節・筋肉という運動器の恒常性維持や疾患の原因となる分子メカニズムを解明し、新たな治療法の開発を試みています。もう一つは、ボストンでの留学経験を生かし、ゲノムワイド解析を応用して、運動器のメカニズムや、がんの骨転移のメカニズムや予防法の確立を目指しています。

私は、今年4月に、橋渡し研究推進担当の副病院長に任命されました。昔から、開発・研究分野と臨床現場には「デス・バレー (死の谷)」と呼ばれる深く長い溝があるとされています。その溝に橋を架け両者を繋ぐために、私のような臨床経験がある基礎研究者が必要だと思っています。臨床現場での疑問を基礎研究に結びつけ、基礎研究で発見したことを臨床に応用するには、臨床部門と研究部門が揃っている大学病院が最適であると考えています。現在、理化学研究所から、大規模な国際共同研究への参加要請が届いています。他大学に先駆けてこうした声がかかることはありがたいことですし、私が窓口となり、この共同研究の進展に繋がるよう尽力していきたいと考えています。



## PROFILE

いまいゆうき◎大阪府出身、1999年大阪市立大学医学部卒業、2005年同大学院修了、医学博士。大阪市立大学大学院医学研究科、東京大学分子細胞生物学研究所を経て、2013年から愛媛大学に教授として着任し、2018年から現職。趣味は阪神タイガース。

## 健康フォーラム2018 (東温市) で特別講演

## 健康寿命を延ばすため、血管年齢を判別する簡易指標を研究

抗加齢・予防医療センター長 伊賀瀬道也

当センターでは「健康寿命を延ばす」をコンセプトに、脳卒中、認知症、骨粗鬆症など健康寿命を短くする疾患の発症を予防するための人間ドック (=抗加齢ドック) を行っています。これらの疾患は「血管の年齢」が「実年齢」より高い「動脈硬化」と関連が深いため、個々の「血管の年齢」に応じて適切な予防法を御説明しています。

研究部門は、受診者データを用いて「血管の年齢」が「実年齢」より高い人の特徴を示す簡単な指標も開発しています。例えば「見た目年齢」という指標があり「老けて見える人は血管の年齢も高い」可能性が高いことがわかりました。また目を開けて片足で何秒立てるかを測定する「開眼片足立ち時間」という指標も重要で、たとえば65歳で40秒未満しか立っていない人は動脈硬化とともに「太ももの筋肉の低下」、「骨密度の低下」、「認知機能の低下」など疾患につながる身体の衰え (医学用語ではフレイルと呼びます) が起きている可能性があります。「握力」もフレイルと関係する重要な指標です。

現在は、これまで重要視されなかった小さな血管 (毛細血管) の老化にも着目しており、さらに健康寿命を延ばす方法の開発に繋げようと考えています。



## PROFILE

いがせみちや◎1991年愛媛大学医学部卒業。公立学校共済組合近畿中央病院循環器内科、愛媛大学大学院等を経て1999年愛媛大学老年科助手、2011年より現職 (兼任)。2015年からは老年神経総合診療内科特任教授も務める。趣味は旅行、車、スイミング。

## 女性医師の活躍

## 多様性を認め、ファミリーのように相談し合える環境

小児科 准教授 江口真理子  
 助教 森谷京子  
 助教 相原香織

現在、小児科には大学院生2人を含む女性医師が7人います。既婚者や子供がいる人もいますが、みな産休や育休後は現場に復帰しています。当科は性別や年齢での垣根がなく、大きな家族のような雰囲気があります。教授が個人的な相談しやすい人柄で、産後復帰するプランも具体的に話ができます。また各スタッフの事情にあわせて仕事を割り振る配慮もしていただけます。

当院には、2007年に院内保育所「あいあいキッズ」が開所しました。また当科の女性医師が病院長に学童保育の実施を相談したところ、これも実現。病児保育や夜間保育もあり、当院は女性医師の声が積極的に反映されていると感じています。

小児科では、男性・女性問わず子どもに関する急な用事でもスタッフ間で互いにフォローしつつ、それぞれの専門分野を突きつめて診療・研究することができます。小児科での仕事が自分の子育てに活かせることもあれば、逆に自分自身の子育てが仕事にも役立つ職場だと思います。



## PROFILE

写真左／もりたにきょうこ◎愛媛大学医学部卒業後、県立中央病院、県立新居浜病院等を経て2012年より愛媛大学勤務。趣味は子供とレゴを作ること。

写真中央／えぐちまりこ◎広島大学医学部卒業後、同大学、国立小児病院(現：国立成育医療研究センター)、英国がん研究所、獨協医科大学を経て2008年より愛媛大学勤務。なかなか日本一にない広島カープのファン。

写真右／あいばらかおり◎愛媛大学医学部卒業後、県立中央病院で初期研修後、県内の地域中核病院を経て、2015年より愛媛大学勤務、大学院入学。2016年度に東京女子医科大学に国内留学。趣味は史跡巡り。

## FROM VIP DOCTOR

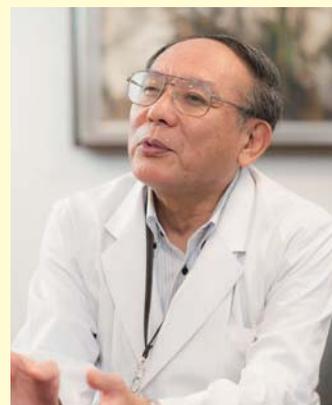
愛媛大学医学部附属病院に期待すること『VIP DOCTORに聞く』

## 愛媛県の医療を牽引する、中心的な役割を期待

住友別子病院 院長 鈴木誠祐

附属病院に期待することは、まず第一に一般病院ではできない高度な医療の提供を行い、愛媛県内で医療を完結させることです。次に、附属病院を中心としたネットワークによって、次世代の「いい医師」を育てていくことです。若手医師の育成を主に担当している高田清式先生(附属病院・総合臨床研修センター長)が「オール愛媛で育成する」とおっしゃっていますが、まさしくそのネットワークの中心的な役割を担っていただきたいと思っています。さらには、愛媛で育った医師が愛媛に残り、地域の医療に貢献できるよう医師を配置することです。医師が都会と県庁所在地に偏在する中で、松山医療圏域以外の地域の医師不足は深刻で、地域医療は崩壊の危機にさらされています。地域の医療、愛媛県全体の医療を支える医師の配置を望んでいます。

最近、附属病院は、医療や研究・教育だけでなく市民公開講座やヘルスアカデミーなど、病気や病院の啓蒙にも力を入れていて、素晴らしいと思います。診療科や各センターが中心となって講座が開催されているのは、それぞれが県内医療のトップリーダーとしての役割を理解されているからだだと思います。今後も、引き続き愛媛県の医療を牽引していただきたいと思います。



## PROFILE

すずきせいゆう◎昭和58年3月、岡山大学医学部卒業。昭和58年4月岡山大学医学部第一内科(消化器内科)入局。昭和58年10月、住友別子病院赴任。平成25年7月院長。平成26年7月理事長・院長。専門は内視鏡を用いた消化器疾患の診断と治療。

# 愛媛大学医学部附属病院 トピックス

お気軽にご相談ください

## 緩和ケア研修会を実施



9月8日(土)に緩和ケア研修会を開催しました。この研修会は、すべてのがん診療に携わる医師等を対象とし、緩和ケアについての基本的な知識を習得することを目的としたもので、当院での開催は今回で10回目となります。研修当日は、医師や看護師、薬剤師等の多職種のスタッフ総勢66人が参加し、がん告知のロールプレイ、地域で連携した緩和ケアの実施について考えるグループワークなど、実践的な様々なプログラムを行いました。

総務課企画・広報チーム ☎089-960-5943

## 看護学生のための放射線講習会を開催



8月22日(水)、県下の看護専門学校の学生及び教員を対象とした放射線講習会を開催し、35人の参加者が講義及び実習を行いました。参加者は、放射線が人体に与える影響や防護の方法、当院における放射線治療や診断について学び、実際の医療現場・機器を見学しました。また、乾燥昆布や塩化カリウムなどの身近に存在するものから出る放射線を測定したり、放射線の飛跡を見ることができ霧箱を作成したりしました。

総務課企画・広報チーム ☎089-960-5943

## 国立大学附属 病院長会議に出席

先般、筑波大学附属病院で開催された国立大学附属病院長会議に、当院の三浦裕正病院長らが出席しました。会議には、全国の国立大学・国立医科大学の附属病院長ら総勢100人余りが出席し、今日の全国の大学病院を取り巻く重要課題「新専門医制度」「働き方改革」「臨床研究支援体制」をテーマとして、グループディスカッションが行われました。その中で議論した内容を、現状と課題及び今後の展望として整理し、出席者で共有するとともに意見交換が行われました。本会議における貴重な情報を自院に持ち帰り、諸課題の改善に向けて取り組むこととしています。

総務課企画・広報チーム  
☎089-960-5943

## 編集後記

さて、本号の表紙は、外来棟1階各所に設置されているホスピタルアートになります。患者さんに少しでも癒しを感じてもらえるよう、平成28年3月に設置したものです。

紙面では、今年4月から本院副病院長(橋渡し研究推進担当)に就任した今井祐記先生に今後の抱負を伺いました。他にも、血管年齢と実年齢の関係を研究する伊賀瀬道也抗加齢・予防医療センター長や女性医師にとっても働きやすい環境がつけられている小児科の先生に話を伺っています。また、当院に期待することを住友別子病院の鈴木誠祐院長にお話しいただいています。是非、ご一読ください。

朝夕の冷え込みが強い時期となりましたが、体調など崩されませんよう、皆様のご健康をお祈り申し上げます。

広報委員会委員長 高田清式

◎表紙：ホスピタルアート

## リレー・フォー・ライフで絆をつなぐ



がんへの理解や支援を願い、患者や家族らが交代しながら歩くチャリティイベント「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2018えひめ」が9月29日・30日に開催され、今回は、当院の緩和ケア認定看護師である林博美さんが、本イベントの実行委員長を務めました。

今年のテーマは「継ぐ」で、当院のスタッフ27人を含む、がん患者・家族・がん医療を支える医療者・市民など約2,000人が参加し、最後まで絆をつなぎました。

総務課企画・広報チーム ☎089-960-5943

## 七夕コンサートを開催



毎年、七夕の恒例行事で、今回は愛大医学部の奇術部と吹奏楽部によるパフォーマンスや演奏が披露され、患者さんやご家族、職員など約200人が参加しました。ジャグリングや手品の他、「世界に一つだけの花」や「ルパン三世のテーマ」などの曲が演奏され、会場は笑顔と手拍子に包まれました。また「ふるさと」の演奏時には、患者さんに歌詞カードを渡し一緒に合唱するなど、楽しいひとときを過ごしました。

医療サービス課 ☎089-960-5099